

琵琶坂遺跡

(琵琶坂遺跡群)

昭和61年3月

長野県佐久市教育委員会

本文目次

例言

第I章 発掘調査の経緯

- 1 調査に至る動機 1
- 2 調査日誌 1

第II章 遺跡の環境

- 1 琵琶板遺跡付近の自然環境（地形地質） 3
- 2 遺跡の歴史的環境 3

第III章 遺構と遺物

- 1 Y1号住居址 7
- 2 Y2号住居址 9
- 3 H1号住居址 11
- 4 H2号住居址 12
- 5 H3号住居址 14

第IV章 総括

- 17

例 言

- 1 本報告書は、長野県北佐久農業高等学校の体育館建設に伴い、佐久市教育委員会が調査主体となり実施した琵琶坂遺跡群琵琶坂遺跡発掘調査報告書である。
- 2 調査は藤沢平治を調査担当者として、昭和60年8月2・3日に試掘調査を行い、昭和60年9月25日～10月5日まで本調査を実施した。整理・報告書作成を昭和60年10月6日～昭和61年3月31日まで行った。
発掘調査対象地 長野県佐久市大字岩村田991、1005-1、1018-1、1021-1。460㎡。
- 3 本書の編集は羽毛田卓也・佐々木宗昭・林幸彦が担当し藤沢平治が校閲した。挿図は堺益子・大井和子・井出百合子・羽毛田卓也が作成し、遺構写真は佐々木・林が撮影し、遺物写真は小山岳夫氏を煩した。
写真図版は佐々木宗昭が作成した。
原稿の執筆は第II章の1を白倉盛男氏が、他を林幸彦が行った。
- 4 本調査に関する資料は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

調査に関する組織

調査主体 佐久市教育委員会

教育長 大井 昭二

教育次長 柳沢 昇一

社会教育課長 茂木 多喜男

社会教育係長 関本 功

社会教育係 白石 賢次、高橋 和敬、林 幸彦

社会教育指導員 森泉 かよ子

調査担当者 藤沢 平治

調査主任 林 幸彦

調査副主任 佐々木 宗昭

協力者 井出 百合子、大井 和子、柳沢 社一、小平 武典、堺 益子、中山 雅志、里見 一幸、金沢 勇治、山浦 義晴、依田 洋一、藤森 幸一、阿部 誠、井出 純一、関 幸吉、上原 幸二、堀 博文、田中 純二、遠藤 幸弘、並木 亮、上原 和行、安藤 健一

I 発掘調査の経緯

1 調査に至る動機

琵琶板遺跡は、仙祿湖から南西に約2 km、幅250 mを測る大規模な琵琶板遺跡群のほぼ中央に位置している。今回の緊急発掘調査の契機は、長野県立北佐久農業高等学校により体育館が建設されることとなり、遺跡の破壊がやむなきに至ったからである。北佐久農業高第学校敷地内においては、これまでに昭和53年度プール建設、昭和55年度園芸実習棟建設及び体育施設建設、昭和58年度農業実習棟建設と4次に渡って行っている。

佐久市教育委員会は、長野県教育委員会文化課の指導を受けながら記録保存をすることとなった。昭和60年8月2・3日に試掘トレンチを入れ状況を窺った。その結果、農業実習の際の深耕によって大きく攪乱を受けているものの数棟の住居址が存在することが確認された。本調査は9月25日より実施した。

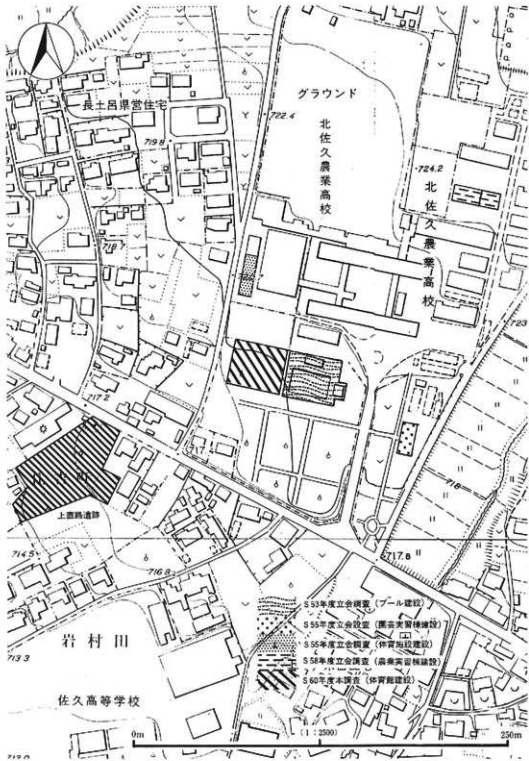
本遺跡群内では、上直路遺跡が既に発掘調査されていて、弥生時代の人骨の両腕に銅釧が装着されたまま出土し各方面に大きな反響を呼んだ。本遺跡は、距離的に近く注視されていた。

2 調査日誌

昭和60年7月24日、調査対象地の表面調査を行い遺物の分布状況をみた。現状が農業実習等によって深耕されているため表土の削平は、重機を使用することとした。8月2・3日の両日幅1 mのトレンチを重機で南北に7本、東西に1本入れてローム層の生きた面の検出に努めた。その結果、調査対象地の北西部に住居址が認められたため、A～Cトレンチの北半分の表土を削平した。精査した結果5棟の住居址が一部重複して検出された。

8・9月は、他所で行っていた調査が手不足となり、本調査は9月25日より開始した。

9月25日、H1号住居址とY1号住居址は、ほとんど全体が重複しており、その全面に深耕による攪乱が及んでいた。まず、攪乱土を掘り下げ遺構の残存状況と重複状況の把握に努めた。以後、Y2・H2・H3号住居址についても同様に、まず、攪乱土の排除作業から開始した。各遺構とも5割以上が破壊されていたためにカマドや炉等の付属施設は、ほとんどが検出されなかった。遺構の写真撮影・実測図作成を随時行い、H1、Y1、H3、Y2、H2の順で調査を進めた。10月3日にはほぼ終了し、10月4日全体図作成後器材を撤収した。整理作業は主に1～3月に行い、3月原稿執筆、編集を行った。



第1図 新設校舎跡地形図及び調査区設定図 (1:2,500 佐久市基本図8・9)

II 遺跡の環境

1 琵琶板遺跡付近の自然環境) 地形地質)

千曲川が南北に貫流する流域に発達した佐久平は、北に向って逆三角形を呈し、東は荒船火山や佐久山地(秩父古生層地帯)に、西は八ヶ岳立科火山帯、北は活火山浅間山に囲まれている。

今回発掘調査した琵琶板遺跡は、その佐久平の北端の浅間火山の南斜面末端部分に位置し、標高719~720m内外を示している。

浅間山は標高2542mの活火山で洪積期に入って活動を開始した最も新しい火山で、最初は黒斑火山として大規模な火山として成生し、火口直径4kmの大火口をもった成層火山で、3000m近い山態を形成していたと考えられている。その後数個の爆烈火口の発達や、ほぼ南北に貫く大断層によって東半分の落ち込み、寄生火山の発生に伴って山体の東半分は破壊され、その部分に前掛火山が発生し、さらにその中に現噴火口が小規模に(火口300m内外)になった三重式成層火山である。

浅間山南斜面には北軽井沢から発源する湯川と、寄生火山石尊山(1007m)北の血の池から発する濁川、小諸に流下する蛇堀川とがあるが琵琶板遺跡付近には湯川の影響がほとんどない。濁川周辺と和田南田切は水便に恵まれ水田も古くから開発され、丘陵中央部は多くは畑となっており、最近まで山林地とさえなっていた部分も多かった。

この付近の地層は概観すれば浅間火山の噴出物の軽石、火山弾、火山砂礫、火山灰の堆積層であるが、和田田切りの断面等で見られる層序は次の如くである。

基盤には黒斑火山の水蒸気爆発による礫原泥流が分布している地帯であるが、この10数mの断崖ではそれを確認することはできない。おそらく更に深い所には見られる筈である。断崖に見られるものは黒斑火山軽石流の厚い堆積で、軽石を含む火山灰砂の堆積で、一部分水流に運ばれた軽石層の薄層を含む水中堆積層でほぼ水平層をなし10m以上の層厚を示している。最上部は濁川の泥らん源のあとを示す火山砂を大量に含む火山灰層が40~50cmの厚さで重なりその表面上部を黒土が被っている。

白倉 盛男

2 遺跡の歴史的環境

佐久市内の遺跡は、昭和57・58年度の詳細分布調査⁽¹⁾によって553箇所が確認されている。この数は今後末調査地域である山林・山野で新しく発見される可能性が高いため相当な数の増加が予想

される。縄文時代は東山や西山の段丘上に濃く、弥生時代～平安時代は千曲川、片見川、湯川流域の平坦地に濃密に分布する。特に市北部の旧浅間町を中心とする地域では、滑津川以北に特有な田切り地形の台地上に集中している。この地域には湯川の他に濁川など数条の河川が西南に向けて流下し、小田井から長土呂近辺の国道141号線までは、急峻な谷がみられるが、小海線及び中山道沿線に至っては、河川との比高は減少し微高地が形成されている。第1表に示したように、これらの台地、微高地には多くの遺跡が存在する。

表から窺えるように、これらの遺跡は弥生時代～平安時代の時間的重複がひんばんである。こ



第2図 周辺遺跡分布図（1：25,000）（国土院発行の地形図より）

とに弥生時代の遺跡は多く佐久地方はもとより、東信地方あるいは長野県を代表する規模・内容を有しているといっても過言ではない。田切り地形が谷底との比高差を減少し微高地が形成されている標高705m付近は、清水田・水引とかいった字名が示すように各所で湧水がみられ、さら

第1表 周辺遺跡一覧表

No	遺跡名	所在地	時代				備考
			縄文	弥生	古墳	歴史	
1	西近津遺跡群	長土呂		○	○	○	一部調査(S46)
2	北近津遺跡群	長土呂		○	○		一部調査(S46)
3	周坊塚遺跡群	長土呂	○	○	○	○	一部調査(S54, 55)
4	芝宮遺跡群	長土呂～小田井	○	○	○	○	一部調査(S54, 55, 57)
5	長土呂遺跡群	長土呂		○	○	○	
6	下 麓 沢	長土呂		○	○	○	
7	新 城	岩村田		○	○	○	
8	曹 坂 新 城	岩村田				○	
9	猪 笹 取 遺 跡 群	長土呂		○	○	○	
10	栗毛坂遺跡群	小田井～岩村田		○	○	○	
11	跡 取 遺 跡 群	小田井～横瀬		○	○	○	
12	西 赤 座	岩村田		○	○	○	
13	上 岩 子	岩村田				○	
14	岩 村 田	岩村田		○	○	○	
15	漢 石	上平尾		○	○	○	
16	栗 巻	下平尾		○	○	○	
17	下 小 平	岩村田		○	○	○	一部調査(S55)
18	上 小 平	岩村田				○	
19	棧 敷	安 原				○	
20	西 大 久 保	上平尾～下平尾	○	○	○	○	
21	蛇塚A遺跡群	安 原				○	
22	下 巻 湯 石	岩村田				○	
23	蛇塚B遺跡群	新子田				○	一部調査(S54, 58)
24	上の坂遺跡群	岩村田	○	○	○	○	
25	円正坊遺跡群	岩村田	○	○	○	○	一部調査(S48, 54, 58)
26	宮 の 後	岩村田		○	○	○	
27	一本橋遺跡群	岩村田		○	○	○	一部調査(S43, 47)
28	宮 の 西	岩村田		○	○	○	一部調査(S58)
29	松 の 木	岩村田		○	○	○	
30	上 砂 田	岩村田		○	○	○	
31	北 西 久 保	岩村田		○	○	○	一部調査(S44, 45, 54, 57)
32	瓦 塚 坂	岩村田		○	○		今回調査地

に、濁川流域を加えて広大な水田可耕地帯が展開する。もちろん、田切り地形の谷底も水量が安定している小河川があって充分水田が営める。いまだ古代の水田址は確認されていないが、この標高705m付近を中心として弧の長さ約3kmの範囲には、弥生時代中期後半～後期の集落が所狭しと密集していることから近い将来に水田址が検出される。

弥生時代中期の集落は、約15万㎡の面積を誇る西近津遺跡群全域に遺物が採集でき、たいへんな規模が予想される。ほぼ同規模として周防畑遺跡群・長土呂遺跡群・岩村田遺跡群・琵琶坂遺跡群・一本柳遺跡群・上の城遺跡群⁽²⁾があげられる。これらに比べて面積は少い北西久保遺跡⁽³⁾では、100棟を超える住居址群が検出されている。100棟は細分すれば3時期に渡っているものと思われるが、いづれにしても従来の佐久高原、冷涼、弥生時代小規模集落という見方を訂正するのに充分なものがある。後期に至っては、さらに、遺跡の数は増加しまさに佐久の大繁栄の感がある。特に本遺跡と同一台地上にあって、国道141号線で現在分断されている上直路遺跡⁽⁴⁾の銅鉋の出土は、佐久地方の弥生時代解明にあたって、たいへんな意義を持つものである。この他後期の集落が調査されているのは、周防畑B遺跡、下長敏遺跡、清水田遺跡、北一本柳遺跡、西八日町遺跡、北西久保遺跡などがある。

古墳時代前期・中期の遺構検出例は、この地域では北西久保遺跡の19棟の住居址だけである。市内の他地域では、新しい検出が相次いでおり今後増加するであろう。後期になると遺跡は数を増す。上の城遺跡15棟、東一本柳遺跡5棟、清水田遺跡3棟、北近津遺跡4棟、西近津遺跡3棟、西八日町遺跡49棟が発掘調査されている。この時期の遺跡は、弥生時代のあり方とはほぼ一致している。古墳はすべて後期に属し、上塚原・下塚原や常田を中心とした群集帯が特に著名である。

奈良・平安時代の遺跡は、従来、奈良時代の土器が明確に示得なく両者を混同して扱ってきた。最近では、周防畑A・B、西八日町遺跡などで住居址が検出されている。

平安時代の代表的な遺跡は、上の城遺跡、西八日町遺跡、北一本柳遺跡、北西久保遺跡がある。この奈良・平安時代の遺跡のあり方は、長土呂付近と上の城一帯に濃密に存在するという傾向がある。

このように、本遺跡周辺は佐久地方でもっとも弥生時代～平安時代の遺跡集中地帯であって本地方の原始・古代史解明にあたって実に豊富な資料を埋蔵しているといえる。

註 文

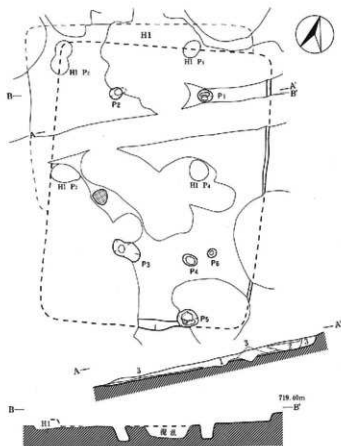
- (1) 佐久市教育委員会 1984 『長野県佐久市遺跡詳細分布調査報告書』
- (2) 昭和58・59年度に約5万㎡の範囲を中佐都農産協同組合による検印地造成事業に先立ち、支柱の部分の調査を行った。1㎡四方の支柱用の囲り方を100箇所調査した結果、ほとんどすべてに遺構が確認された。
- (3) 昭和57年度に台地上の第1次、昭和60年度に第2次調査が行われた。200棟余の弥生時代～平安時代の竪穴住居址の他に埋蔵が出土した周縁をはじめ17基の周溝・古墳が検出された。
- (4) 本遺跡に隣接し、昭和60年度に調査された長さ10mを誇る大形の住居址内に設けられた長方形土壇より15点余の銅鉋が人骨と共に出土した。

III 遺構と遺物

1 Y1号住居址

本住居址は、調査区の南隅より検出された。H2号住居址と重複し、H2号住居址に北側半分を破壊されている。さらに、溝状・円形状にとさまざまな形状で深耕により床面下まで破壊されている。

平面形態は、南北推定600cm、東西推定460cmの長方形を呈する。主軸はN-12°-Eを指す。壁



- 1層 黒褐色土 攪乱層。
- 2層 黒褐色土 しまりがある。ローム粒子、パミス含む。(H1号住居址の覆土)
- 3層 茶褐色土 粒子粗く砂質に富む。ローム粒子、パミスを含む。炭化粉少量混入。

0 (1:80) 2m

第3図 Y1号住居址実測図

が確認できたのは、東壁 $\frac{1}{2}$ と南・北壁の一部である。東壁で18cm、北壁4cm、南壁15cmを測る。覆土は、攪乱とH1号住居址によりほとんど認められず、わずかに床面直上に茶褐色土が残っていた。

床面は、よく踏み固められて堅緻な状態であり、西と南にやや傾斜するもののほぼ平坦である。

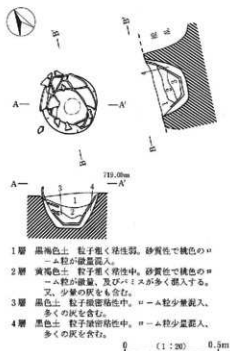
ピットは6個検出され、支柱穴はP₁-P₄で主軸と同一方向に長辺がある長方形に配置されている。深さは、P₁が43cm、P₂33cm、P₃が56cm、P₄が32cmを測る。P₂・P₃・P₄の3本は、掘り方が住居址外側に傾斜している。P₅は、入口の施設に関するものとも考えられるが、通常は対で検出される例が多く、一個単独の場合だとほぼ中央にある。した

がって、P₅は入口施設に関するピットとは別の機能が考えられるが、貯蔵穴とするには若干貧弱である。

炉は副炉が検出されたが、主炉はP₁・P₂間の床面が破壊されているため遺存してなかった。副炉はP₂・P₃間に位置している。径30cm、深さ18cmを計測し、壺形土器の底部を埋設した埋燵炉である。この埋設された土器内には、灰がかなり顕著に認められたが、珍しいことである。

出土遺物は、本住居址の覆土がほとんど遺存していないこともあって少量であった。図示できたのは、壺形土器1、甕形土器1、小形台付甕形土器1である。

第5図の3の壺形土器は、残存高18cm、底径10.2cmを測る大形のものである。副炉に埋設されていた。胴下部の稜線ははっきりとしたくび

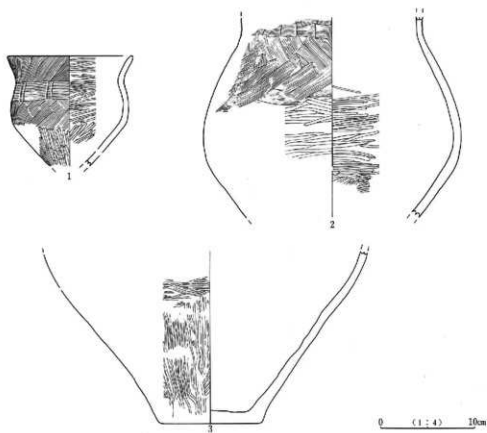


- 1層 黒褐色土 粒子粗く粘性弱。砂質性で褐色のローム粒が微量混入。
- 2層 黄褐色土 粒子粗く粘性中。砂質性で褐色のローム粒が微量、及びロームが多く混入する。又、少量の灰をも含む。
- 3層 黒色土 粒子微密粘中。ローム粒少量混入。多くの灰を含む。
- 4層 黒色土 粒子微密粘中。ローム粒少量混入。多くの灰を含む。

第4図 Y1号住居址炉址実測図

れを示さないが認められる。外面に赤色塗彩は施されていない。外面は丁寧に稜線付近は横位に、胴下部は縦向きミガキが施されている。内面は剥落がはげしい。内面の稜線付近には煤が付着している。炉に使用されていたため第2次的に熱を受けた結果と思われる。第5図2の甕形土器はP₅内より出土した残存高21.2cm、最大径は口辺部が欠損しているものの胴部にあると思われ27.5cmを測る。頸部から胴上部には、櫛描斜走文・簾状文が施されている。簾状文が最初に続いて口辺部と胴上部の斜文の順である。簾状文は時計回りに等間隔に1連片、胴上部の斜走文は上方から下方に向け、上段は左回りに下段は右回りに施文されている。櫛歯は簾状文・斜走文とも14本を数える。第5図1の小形台付甕形土器はP₁とP₄のはほぼ中間の床面上より出土した。胴下部・底部の残存状況から台が付いていたものといえる。残存高11.7cm、口径13cm、最大径は胴部径にあり13.4cmを測る。底径は約4.5cmで台部に続く。口辺部には、上方から下方へ向けて斜走文が右回りに、胴上部から中央部にかけて、斜走文が上方から下方へ向けて上段が左回りに下段が右回りに施された後、頸部に右回りの簾状文が等間隔・2連述で10ヶ所施文されている。さらに胴中央部から底部にかけては、斜走文を一部消して縦方向にミガキされる。櫛歯はいずれも12本を数える。

これらの土器は当地方における弥生時代後期前半の特徴を表わしているといえる。第5図2の



第5図 Y1号住居址出土土器実測図

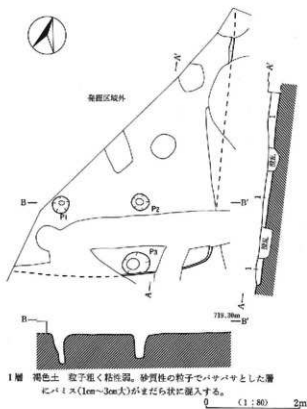
甕形土器の胴中央部のふくらみはたいへん強く、斜走文の施文範囲が胴部のかなり上部でとどまっていることと続くミガキが横方向にされているのは、佐久地方では特異な存在である。

2 Y2号住居址

本住居址は調査区の北西隅より検出された。住居址の東側一部をH3号住居址によつて破壊され、北・西側は調査区域外となっている。深耕によりさまざまな形に床面下まで破壊されている。

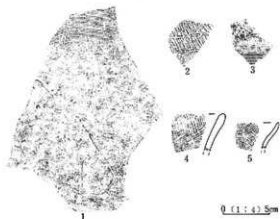
平面形態および規模は、得られた資料が少ないために不明確であるが、P₁とP₂の位置とわずかに残存している南東コーナーと、東壁・南壁の一部より推測すると東西は480cmぐらいいなろう。

P₁とP₂は支柱穴で、P₁は径36cmの円形を呈し、深さ60cmを測る。掘り方は外側へ少し傾斜してい



第6図 Y2号住居址実測図

1層 褐色土 磁子粗く粘性弱。砂質性の粒子でバラバラとした層にバイス(1cm~3cm大)がまだら状に混入する。



第7図 Y2号住居址出土土器拓影図

る。P₂は東西40cm南北34cmを、深さは50cmを測る。P₃は東西60cm南北44cm、深さ15cmを測る。Y1号住居址と同様に入口施設のビットというよりも、貯蔵穴と考えたほうがよいかもしれない。

床面の破壊を受けていない部分は、固く踏みしめられて堅緻であり一見して床と認められる。ほとんど平坦である。

住居址の大半が調査区域のため炉や北側の支柱穴は未確認である。

出土遺物は弥生土器が少量で実測可能なものはない。第7図に5点の破片を拓影で示めた。

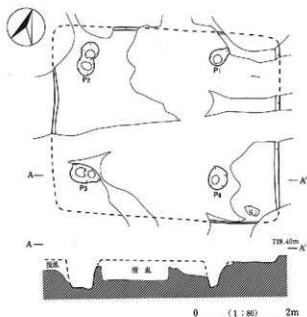
第7図1・2は壺形土器で1は無彩、2は赤色塗彩されている。1の頸部にはいわゆるT字文Bが施文されている。横走の櫛描文は櫛歯13本で2段で、それを3本の櫛歯で垂直に切っている。胴部は横方向のミガキが粗雑に施される。2は頸部片で篋描横走平行線文間に篋描斜走平行線文が上から下へ施される。3~5は甕形土器で、4・5の口辺部には櫛描斜走文が、頸部には夔状文が施されている。いづれも口唇部は面取りされていない。

本住居址の時期について言及す

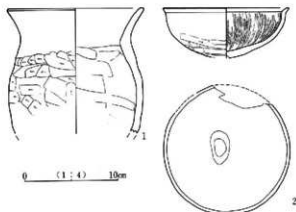
るのには資料が乏しすぎるが、これらの土器は弥生時代後期前半の特徴を有している。

3 H1号住居址

本住居址は調査区の南隅より検出され、Y1号住居の北側半分を破壊して構築されている。住居址の半分は深耕のために破壊されている。



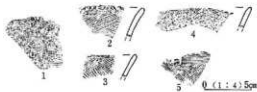
第8図 H1号住居址実測図



第9図 H1号住居址出土土器実測図

平面形態は南北400cm、東西480cmを測る東西に長辺をもつ長方形を呈する。カマドは北壁中央にあったと思われるが完全に破壊されていて痕跡をとどめていない。わずかにP₁の西側にカマドに使用されたと思われる浅間山の火山岩が一個出土したのみである。主軸はN-20°-Eを指す。壁残高は北壁5cm、南壁6cm、東壁17cm、西壁8cmを測る。覆土は茶褐色土層が1層認められた。床面は堅緻であった。

ピットは主柱穴が4個検出された。柱穴間は住居址が東西に長いことに応じてP₁・P₂間が、P₁・P₄間より長くなっている。P₁・P₃・P₄は、深耕による攪乱をすべて除去したところから確認されたため上部は相当削平されている。P₁は32cm、P₂は56cm、P₃は40cm、P₄は48cmの深さを測る。



第10図 H1号住居址内出土土器拓影図

出土遺物には弥生土器、土師器、砥石がある。土師器は甕・小形甕・坏形土器がある。図示し得たのは小形甕形土器1点、坏形土器1点、他は小破片である。

1は口径が推定12.4cm、残存高13.2cmを測る。最大径は胴中央部よりやや上位にあって14.4cmを計測する。外面の調整は口辺部ヨコナデ、胴部横方向を主とするヘラケズリ。内面は口辺部ヨコナデ、胴部はヘラナデ、第2次焼成をうけている。2は口径14.2cm、器高5.3cmを測る。口辺部は内稜をもって短かく外反する。底部は丸底である。内・外面の口縁部はヨコナデ、外面ヘラケズリの後上半部にナデ、内面はナデの後に放射状のヘラミガキ。底部は焼成後に穿孔されている。第11図は、流紋岩製の砥石で、存長8cmを測る。各面に使用痕がみられ磨り減っている。折損面は古い。

本住居址はY1号住居址を破壊しているため弥生土器の混入が多く、第10図に示した。壺形土器第10図1は赤色塗彩されず、T字文Cが施される。垂下する櫛描文の櫛歯は10本、第10図2～5は甕形土器、2と4の口唇部は面取りされる。2の口唇部には櫛歯による刻目が施される。いづれにも櫛描斜走文が施文されている。

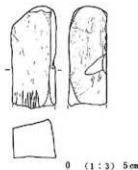
本住居址には床面より出土した土師器の小形甕形土器と坏形土器より古墳時代後期前半に比定できよう。

3 H2号住居址

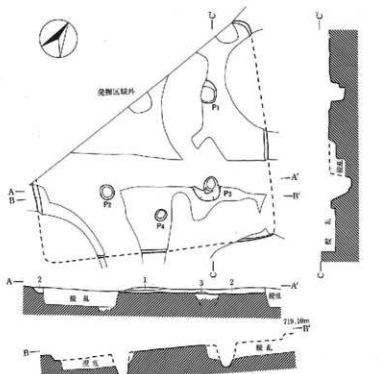
本住居址は調査の西側部より検出され、 $\frac{1}{3}$ が調査区域外である。他の住居址と同様に農業実習のための深耕によって破壊されている。

平面形態は南北460cm、東西500cmの東西に長い長方形を呈する。主軸方位はN-40°-Eを指す。壁残高は北壁20cm、南壁19cm、東壁14cm、西壁12cmを測る。攪乱を受けていない覆土はわずか10cm足らずであった。3層認められた。遺存している床面は堅緻ではば平坦である。

ピットは4個検出され、P₁~P₃が柱穴である。P₁の床面からの深さ32.5cm、P₂の残存部の深



第11図 H1号住居址出土土器実測図



- 1層 黄褐色土 直径1cmのバリスを少量含む、黄色及び桃白色のローム粒子混入。きめ細かい、さらさらしている。
 2層 暗茶褐色土 直径1-2cmのバリスを含む、黄色ローム粒子を少量含む、きめ細かい。
 3層 黄褐色土 直径0.5cmのバリスをごく少量含む、黄色ロームを多量に含む。1層より色調が明るく、きめ細かい。

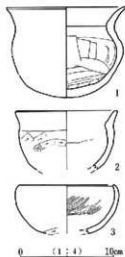
0 (1:80) 2m

第12図 H2号住居址実測図

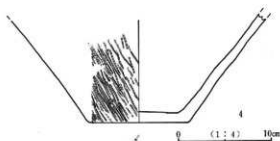
さ22cm、P₃は床面からの深さ51cmを測る。

出土遺物は土師器、弥生土器、石器がある。

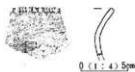
第13図 1・2は小形菱形土器である。1は口径12.5cm、器高9.6cm、最大径は口辺部にある。口辺部は短く外反する。胴上部に張りを持つ。このため頸部のくびれが強くなっている。底部は丸底である。調整は口辺部の内外面にヨコナゲ、胴部外面剥落のため不明瞭だが、縦方向のヘラケズリがみえる。胴部内面ヘラナゲ。2は口径



第13図 H2号住居址出土土器実測図



第14図 H2号住居址掘削内出土土器実測図



第15図 H2号住居址内出土土器拓影図

10.6cm、推定器高5.5cm、最大径は口径である。3は口径10.2cm、器高5.2cmを測る。素縁口辺で口辺部が内弯する。底部は丸底である。外面の調整は底部ヘラケズリ、口辺部ヨコナデ。内面はヘラミガキが施されている。他に図示できなかったが、口辺部短く外反し、内稜をもつ坏形土器と一孔の甌形土器が出土している。

第16図1・2はいづれも安山岩製の磨石である。

第14・15図は弥生土器である。第14図は壺形土器の底部で、底径10.8cm、残存高10.8cmを測る。外面は斜方向のヘラミガキ。第15図は甕形土器で、口辺部に柳歯数6本の斜走文が右回りに、頸部に右回りの柳歯状文が口唇部には篋による刻目が施される。

本住居址は第13図の土師器の特徴から古墳時代後期前半に位置づけられる。第14・15図の弥生土器は混入したものである。

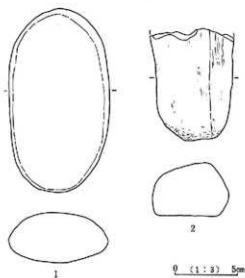
5 H3号住居址

本住居址は調査区内の北側より検出された。他の住居址と同じく農業実習のため円形状や溝状の深耕によって住居址の $\frac{1}{2}$ ほどを床面下まで破壊されている。Y2号住居址と重複し、Y2号住居址の東壁の一部を壊して構築している。

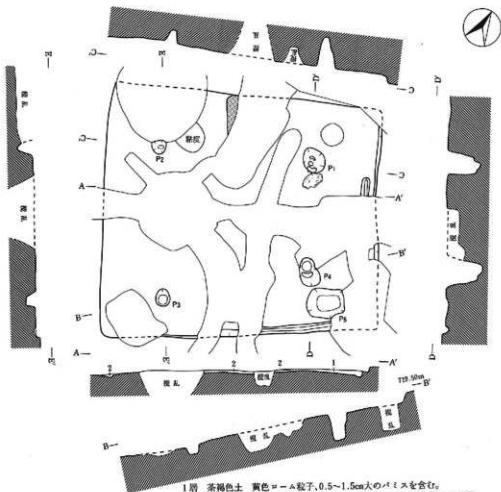
平面形態は南北500m、東西585cmを測る東西が長くなる長方形を呈する。主軸方位はN-25°-Eを指す。

北壁と西壁はほとんど立ち上がりが遺存していない状態であった。東壁の残高は16cm、南壁は10cmを測る。覆土は2層認められ、第2層には帯状に炭化物が含まれていた。遺存している床面は実に堅緻である。

ピットは5個検出され、P₁~P₄が主柱穴である。P₁は長径48cm、短径44cm、深さ67cmを測る。P₂は北側が破壊されている。深さは28cmを測る。P₃は東西30cm、南北36cm、深さ22cmを測る。P₄は北側が破壊されている。深さ60cmを測る。P₅は長辺90cm、短辺60cm、深さ57cmを測り長方形を



第16図 H2号住居址出土石器実測図



- 1層 赤褐色土 黄色ローム粒子、0.5~1.5cm大のバミスを含む。
 2層 黄褐色土 黄色・粉白色のローム粒子を含む。小つぶのバミス少量炭化物が寄状に混入する。

0 (1:80) 2m



0 (1:4) 10cm

第18図 H3号住居址出土土器実測図

第17図 H3号住居址実測図

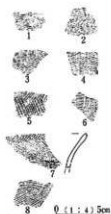
呈する。貯蔵穴と思われる。

カマドは北壁中央部にわずかに痕跡をとどめている。
 P₁の南脇から出土した浅間山系の火山岩が、袖部に使用されたものと考えられる。

周溝が東壁と南壁の一部に認められた。幅16cm~18cm、深さ4cm~8cmを測る。

出土遺物には、弥生土器、土師器、須恵器があり、実測可能なのは土師器1点である。

第18図は碗形土器で口径11.7cm、器高6.8cmを測る。球体の一部を切ったような形状で素縁口辺のものである。口辺部が直立し底部は丸底である。外面は横方向へラミギキ、内面は黒色研磨。他に土師器の小形甕、長胴の甕、内壁をもつものおよび素縁口の坏形土器片、須恵器の蓋坏・坏



第19図 H3号住居址内出土土器断片図



第20図 H3号住居址出土土器実測図

年土器片が出土している。

第19図1～8は弥生土器で混入遺物である。すべて甕形土器である。胴部片で櫛描波状文が施文されている1・3・4、胴部に櫛描斜走文が施文されている2・5・6・8がある。2・6は頸部に櫛描簾状文を右回りに施す。7は口辺部片で、口縁端部に櫛描斜走短線文を右回り、続いてその下に櫛描斜走文を施す。さらに、これを切って頸部には、櫛描簾状文を右回りにめぐらしている。

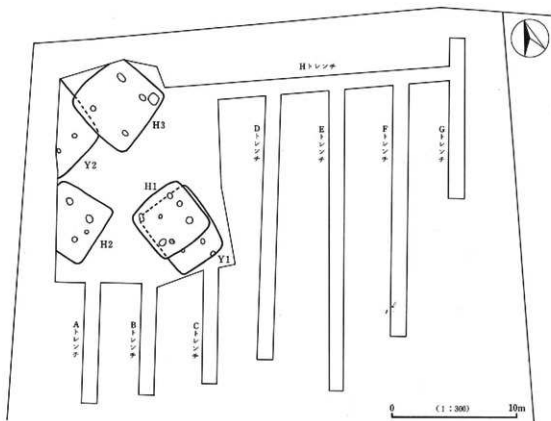
第20図は頁岩製の石器で2面に使用痕が認められる。砥石の機能も考えられようか。

本住居址の時期は、第18図の土師器碗形土器の特徴、カマドを有していること等から古墳時代後期前半に比定される。

IV 総 括

琵琶坂遺跡群琵琶坂遺跡は、長野県北佐久農業高等学校敷地内においてこれまでに4次にわたる調査が行なわれている。

昭和53年度の第1次調査は、プール建設に伴ない実施された。重機で深く掘削する際に立会調査を行なった。遺構・遺物は確認されず、湿地状の堆積層がみられた。昭和55年度の第2次調査の園芸実習棟建設に伴ない立会調査では、約2m程深掘したが全層砂礫層と有機質を多量に含む黒色土層との互層であった。昭和58年度の第4次調査の農業実習棟基礎工事掘削箇所の土層は、地表面下30~60cmで黄色・白桃色の浅間山の火山堆積層に達した。これらの状況から、学校敷地の南東部においては、北東から南西にむけての旧河川または低湿地が存在していたことが判明した。したがって、現在プールより以西は北東から散高地が、隣接する上直路遺跡に連続していることがいえる。さらに、南へ伸びて円正坊遺跡へと続いている。



第21図 琵琶坂遺跡遺構全体図

今回の調査は琵琶坂遺跡内で第5次となり、本調査としては初めて行われた。遺構の確認を実施したのは、約300㎡の範囲である。検出された遺構は弥生時代後期前半の住居址2棟、古墳時代後期前半の3棟、計5棟である。出土遺物は弥生時代後期前半の壺・甕・坏形土器等、古墳時代後期前半の土師器・小形甕・甌・坏・椀形土器、須恵器蓋坏・坏形土器がある。

弥生時代後期の住居址2棟のら出土した土器群は、上直路遺跡Y1号住居址と類似している。さらに、両者の距離は80mと至近距離を測る。上直路遺跡からは住居址内に付設された土壇から銅剣15点を装着した人骨1体が出土している。今回の2櫓の検出は、上直路遺跡とともに同一集落の範囲を把握する上で貴重な資料といえる。

古墳時代後期の住居址3棟も主軸辺が短いという特徴があり該期の住居址地形態を知る上で資料の増加を得たわけであるが、本遺跡を含む同一敷高地上の、円正坊・清水田遺跡等の報告をまっさらに詳しく検討することとしたい。



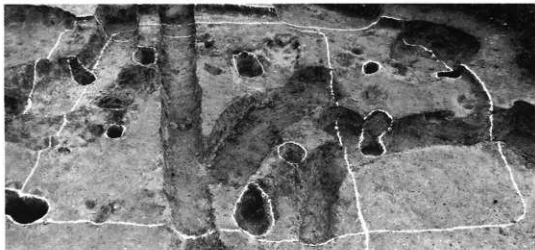
真琴空襲周辺跡遺板野



1. 琵琶坂遺跡全景（南西より。Y1・H1・H2・Y2・H3がみえる）



2. Y1・H2号住居址全景（南より）



1. Y1·H2号住居址全景(西より)



2. Y1号住居址遺物出土状態



3. Y1号住居址P5内遺物出土状態



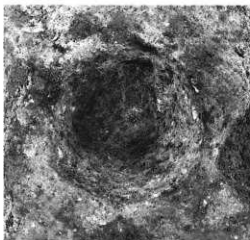
4. Y1号住居址炉



5. Y1号住居址炉



1. Y1号住居址伊



2. Y1号住居址伊埋設土器除去後



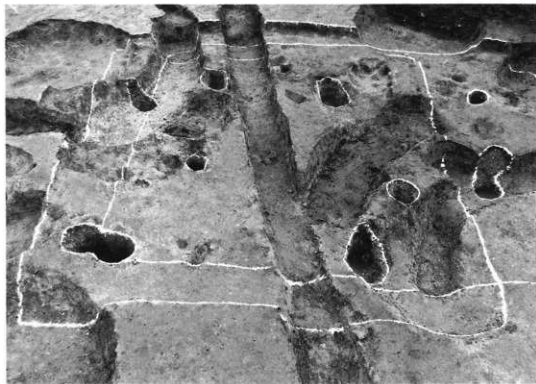
3. Y2号住居址全景（南東より）



4. 調査スナップ



5. 調査スナップ



1. H1号住居址全景(西より)



2. H2号住居址全景(南より)



1. H2号住居址全景（西より）



2. H3号住居址全景（南西より）



1 H1号住居址出土土器 5-3



2 Y1号住居址出土土器 5-1



3 Y1号住居址出土土器 5-2



4 Y2号住居址出土土器 7-1~5



茨城県遺跡出土外生土器 15-19-10



6 H2号住居址出土土器 13-1



7 H2号住居址出土土器



8 H3号住居址出土土器 18-1



9 H1号住居址出土土器 9-2



H-1



H-3



H-2



H-2

10 窪形灰遺跡出土土器 11・16・20

長野県佐久市琵琶坂遺跡発掘調査報告書

昭年 61 年 3 月 発行

編 集 者 琵琶坂遺跡発掘調査団

発 行 者 佐 久 市 教 育 委 員 会

印 刷 所 株 式 会 社 佐 久 印 刷 所